

教育系学生の態度変容過程の研究 —その3—

— 新任教員の成長感覚を追って — 千葉大学 明石 要 —

1 問題の所在

本発表は、教育系大学を卒業し教員となった新任教員が、どのようにして自己成長をとげているか、を明らかにしようとしたものである。すなわち、赴任したときの期待と現実のズレをどれほど感じているか、またどのような悩みにぶつかり、どのように解決しているか、そしてどんな教師をモデルにしながら成長しているか、を具体的に探る。

これまで、教育系大学の卒業生を対象とした研究がないわけでない。女教師を対象としたものに深谷昌志・和子「女教師問題の研究」や池田孝男「女教師の職業意識に関する調査研究」などがある。また、東京学芸大学の卒業生を対象とした麻生誠らの研究や東京都の小学校教員を対象とした永井聖二らの研究もある。さらに、新任教員を対象にして「教員になる」過程を明らかにした田中一生の「新任教員の職業的社会化過程」がある。これらは、ともに教員の職場における社会化(On the job Socialization)の過程を明らかにしようとしたものである。

しかし、これらは教員になっていく過程を分析しているものの、継続的な視点が欠け、必ずしも十分なものになっていない。例えば、大学時代に形成された意欲や資質が教員となったとき、実際どのように変化したか、それから何につまずいて悩んでいるか、あるいは何に喜びを感じているか、そしてそうした体験を通して自己の成長をどのようにとげているか、がはっきりと述べていない。

したがって、本研究は大学4年間追跡して

また学生を母集団として、教員になって2、3年の経験年数の者を対象として彼らがどのようにして教員になっていくか、を探るものである。

2 調査方法

- 1) 調査時期 …… 昭和59年6月末〜7月。
- 2) 調査対象 …… 昭和56、57年度千葉大学を卒業した者の中で小学校の教員になったもの。
- 3) 調査実施の方法 …… 郵送法

3 調査票の構成

- 1) 初任時の意欲
- 2) 大学時代と比較して生活行動の変化
- 3) 日常の教育行動の実態
- 4) モデルとする教師像
- 5) 教員の仲間行動
- 6) 悩みと解決方法
- 7) 新任教員の生活スタイル

4 卒業時点の意識

1) 教職意識の変化

入学時	… 43.3%	(ぜひなりたかった)
2年次	… 44.6%	
3年次	… 50.9%	
実習前	} 4年次	… 59.0%
実習後		… 73.2%

5. 結果

当日配布